

登場人物



愛加那
Aikana

西郷を支えた愛深き妻

愛加那は通称で、本名は龍 愛子。夫婦は仲睦まじく暮らし、菊次郎と菊子という2人の子どもをもうけた。後に子どもたちは鹿児島島の西郷本家に引き取られたが、愛加那本人は当時の慣習により1人島に残った。

西郷どんの足跡



西郷南洲流謫跡

— 大島郡 龍郷町 —

西郷の奄美大島で3番目の住居。1861年11月20日に完成したが、翌日に藩から鹿児島へ帰るよう召還状が届いたため、ここでの生活は2か月にも満たなかった。現在は愛加那の子孫が管理している。

アクセス・周辺情報などはこちら P14

明治維新150周年 & 西郷どん放映!

2018年まで

あと 一八三日

※2017年7月1日現在

次回「西郷と温泉」※予定



西郷どんの大島群島での潜居と謫居時代。
さまざまな理由から離島での生活を経験した西郷どんは、各島に多くのエピソードが残されています。今回は、西郷どんと島にまつわるお話。

※潜居:隠れ住んでいること。 ※謫居:罪によって、遠くの土地へ送られていくこと。



本文監修:徳永 和喜(西郷南洲顕彰館)
画:KENRO

第2話

西郷隆盛と奄美での暮らし

安政の大獄と西郷の天命

安政の大獄とは、大老の井伊直弼が、將軍継嗣問題で次期將軍に慶喜を推す一橋派の勢力を、徹底的に弾圧した事件です。清水寺成就院前住職の月照は薩摩藩に貢献した勤皇僧であったため弾圧の対象となり、西郷は月照の安全を確保するために薩摩藩にかくまう目的で連れ帰りました。しかし、斉彬公亡き後の藩体制は反転、薩摩藩は幕府からの弾圧を恐れ、藩への影響が及ばないよう月照の処分を決定したのです。斉彬公の逝去と藩の決断への虚しさから、西郷は月照と共に錦江湾に入水し自殺をはかるとされています。

奄美大島潜居の歴史的意義

西郷は奄美大島潜居の事態に、「天皇親政をめざす草莽の志士達は安政の大獄で憤死した。自分だけ生きていて良いのか、生き恥を晒している」と悩み苦しみます。しかし、この奄美潜居こそが天が安政の大獄から西郷を守り、新たな時代を担う人物として選んだといえるのです。すなわち、幕府打倒による封建体制を崩壊させ、東洋初の近代国家である新政府を命ぜられました。京都の不穏な動きを察知し、その対応を急務として京都に上ります。その結果、命令違反とする久光によって徳之島へ流罪とされました。まさに罪なき罰という冤罪です。

徳之島流謫時代

文久二年(一八六二年)徳之島の湾仁屋(現天城町湾屋)に上陸して数日滞在、その後岡前に移動しました。まもなく沖永良部島遠島命令がだされます。役人や人々の待遇は罪人扱いではなく、丁重を極め、「御赦免をこうむり候ても、滞島相願ひ申すべき」と、徳之島の生活に感謝しています。現在、徳之島には上陸碑、謫居跡史跡公園などが整備されています。

沖永良部島流謫時代

文久二年(一八六二年)沖永良部島の

府の樹立という偉業を成し遂げたのです。

奄美大島潜居時代

西郷の奄美大島潜居は、藩が幕府の嫌疑を避けるためでしたが、奄美大島の人々は、西郷をあたたかも犯罪人と見るように、西郷にはいたたまれませんでした。気候や言葉の違い、生活習慣も異なることから精神的にも辛いものがありました。大きな転機がやってきました。龍家の娘愛加那との結婚です。さらには菊次郎の誕生などが西郷の奄美大島での生活を一変、「私にはとんと島人になり切り」のように藩への召還を諦める余裕も生まれ、人を思う心や人のために何をなすべきかの哲学や思想を獲得したといわれます。現在でも龍郷町には安政六年(一八五九年)に西郷が船で渡ったときの船繋ぎ松跡と、この松で作られた西郷と愛加那の像が展示されています。

藩政への復帰と挫折

奄美大島での生活が三年を迎える直前に、召還状が届きます。国父久光が藩兵一千人を率いた、世にいう文久の改革の始まりです。目的達成には西郷の人脈や能力に頼らざるをえませんでした。西郷は久光に、熊本藩・福岡藩など九州事情の視察と下関での待機を伊延に上陸し、流謫地和泊の牢までは馬が用意されましたが、西郷はこれが歩く最後との思いから徒歩で移動しました。間切横目の土持政照は、外牢生活で衰弱した西郷の体力が早く回復するよう、自費で座敷牢を造って支援しました。後に義兄弟の契りを結ぶほどの信頼関係ができ、復帰後の西郷の活躍は土持の配慮なくしてはなかったといわれています。

